大 名 の 数 寄　― 茶の湯 ―

平成28年7月12日（火）～9月11日（日）

A:7月12日（火）～8月9日（火）　B:8月10日（水）～9月11日（日）

桃山時代に武将の間でも流行した「侘び茶の湯」は、江戸時代には「御数寄屋（おすきや）」の接待として、公式行事の一部に組み入れられた。こうして固定された茶の湯は、「侘び茶の湯」の持っていた、美や新たな価値観をうち立てて行く自由な創造の精神を失って武家故実となり、格式行事と化した。大名は邸に茶室を設け、将軍の「御成（おなり）」をはじめ、晴の行事に備えた。

茶の湯道具もまた格式道具となった。桃山時代に武将や上層町衆や数寄者（すきしゃ）が持っていた道具の大半は、江戸時代には将軍や大名の秘蔵品となり、「名物」の道具は、時に一国一城にもあたるとされ、その所持、非所持が家の格を表すとまで評された。

凡例：○は重要美術品

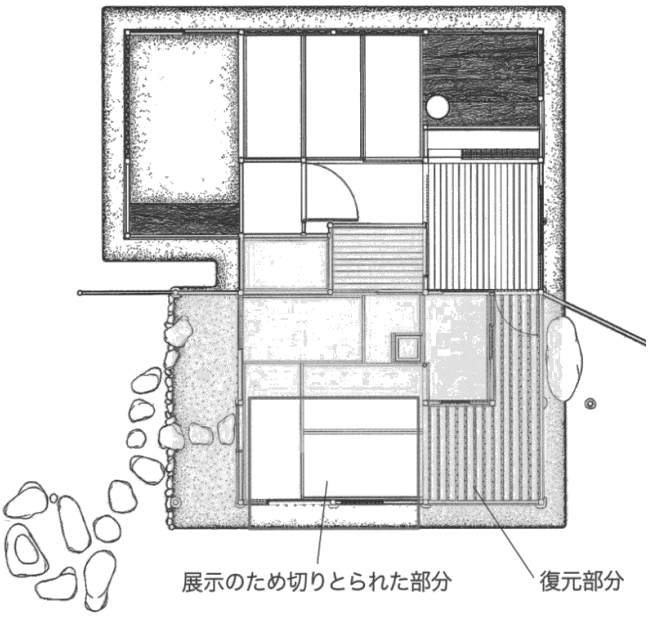
No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
猿面の茶室						
1		小倉色紙臨模「こひすてふ」	徳川家康筆 藤田家・森川勘一郎（如春庵）旧蔵	桃山	16-17	A
2		和歌色紙「神風や」	徳川秀忠（2代将軍）筆 藤田家・森川勘一郎（如春庵）旧蔵	桃山-江戸	16-17	B
3		古染付高砂手花生		明	16-17	
4		古芦屋擂座釜		室町	15	
5		瀬戸筋節水指		江戸	17	
6		唐物丸壺茶入		元-明	14-15	
7		竹茶杓	伝豊臣秀吉作　岡谷家寄贈	桃山	16	
8		刷毛目茶碗　銘 白波	岡谷家寄贈	朝鮮王朝	16	
徳川美術館の名碗						
9		油滴天目（星建盞）		南宋	12-13	A
10		染付唐草文茶碗　銘 荒木	荒木村重・千利休・徳川家康（駿府御分物）・徳川義直（尾張家初代）所用　大名物	明	16	B
戦国武将の茶道具						
11		漢作肩衝茶入　銘 靭	足利義政・豊臣秀吉・徳川光友所用 大名物	南宋-元	13-14	
12		三島筒茶碗　銘 藤袴	織田有楽・徳川義直（尾張家初代）所用 大名物	朝鮮王朝	15-16	
13		竹茶杓	織田道八作　岡谷家寄贈	江戸	17	
14		唐物茶壺　銘 金花	六角氏・織田信長・豊臣秀吉・松井有閑・ 徳川家康・徳川頼宣（紀伊家初代）所用 西条松平家伝来　大名物	南宋-元	13-14	
15		古芦屋糸目釜	武野紹鷗・徳川家康（駿府御分物）・ 徳川義直（尾張家初代）所用　名物	室町	15	
16		青磁壺形水指	徳川家康（駿府御分物）・ 徳川義直（尾張家初代）所用	明	16-17	
17		竹掛花生　歌銘 むさし鐙	小堀遠州作	江戸	17	A
18		竹一重切花生	織田有楽作	江戸	17	B

No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
19		和歌懐紙「あつまちを」	足利尊氏筆　徳川宗春(尾張家7代)所用	南北朝	14	A
20		僧正遍昭集臨模	徳川家康筆	江戸	慶長15年<1610>	B
21		小野小町像	徳川義直(尾張家初代)筆	江戸	17	A
22	○	蘆葉達磨図	宮本武蔵筆	江戸	17	B
23		漢作瓢簞茶入　銘 玉津島	小堀遠州・片桐石州箱書 本阿弥光的・茶屋長以・茶屋宗古・本多忠憲所用　中興名物	南宋-元	13-14	
		珠光純子仕覆	(漢作瓢簞茶入 銘 玉津島　附属)	明-清	16-17	A
		柿色間道織留仕覆	(漢作瓢簞茶入 銘 玉津島　附属)	明-清	16-17	A
		萌黄地鳥文金襴仕覆	(漢作瓢簞茶入 銘 玉津島　附属)	明-清	16-17	B
		間道織留仕覆	(漢作瓢簞茶入 銘 玉津島　附属)	明-清	16-17	B
24		朱塗四方盆		明	16-17	

以上

第2展示室のみどころ

猿 面 茶 室



待庵(たいあん)・如庵(じょあん)と並んで茶室として最も古く注目すべき遺構で、国宝にも指定されていたが、昭和20年(1945)、戦災にあって亡失した。もとは清須城内に営まれていたとの伝承があり、慶長15年(1610)、名古屋城内に移築され、上使(じょうし)の接待場にあてられていた。明治に至って城内の建築物が払い下げられ、明治5年(1872)末森入舟山(現千種区見附町)に移築したが、同13年、名古屋博物館(後の愛知県商品陳列館)にこれを寄付、さらに昭和8年、鶴舞公園内に移設された。

茅葺(かやぶき)屋根の素朴な外観を形成し、内部は四畳半台目(だいめ)、下座床(しもざどこ)で、茶道口(さどうぐち)と給仕口(きゅうじぐち)を具え、中柱の隣の二枚障子の口の外には広縁を付していた。作者は、織部あるいは有楽と伝えられるが、詳らかでない。床柱の節の様態が猿面に似ているというのでこの席名が付いた。